



全員で100周年を、と平山会長

皆様あけましておめでとうございます。良き新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

私は昨年6月、会長に就任し、まもなく迎える本会の創立100周年事業の計画、立案に専念いたしました。この結果、その大綱を

新春を迎えて 「協調と融和で100周年を」

日本山岳会会長 平山 善吉

去る10月22日、理事、評議員、幹事、支部長、そして歴代の会長等々の皆様にお集まりいただき、報告いたしました。すでに申し上げましたように、100周年事業については、全員参加をモットーに逐一機会をみて皆様にその経過を報告したいと思っています。

会長就任以来、短い期間であります。が、昨年をふり返ってみますと、10月初旬、ブータン王国の観光局長ハウ・ワンチュク氏のご訪問を受け、歓談いたしました。このなかで「日本山岳会創立100

周年にあわせて3つくらいの山を開放したい。ぜひ登りに来てください」とおっしゃいました。宗教上登山を禁止しているブータン王国からのお誘いです。大変うれしく思いました。

また、11月中旬には機会を得て中国登山協会を訪問し、会長就任の挨拶を申し上げました。このとき、王宝良首席は「両国が仲良く山登りをするのが、日本と中国の平和に最も良いことであり、大切なことです」と申され、大変感銘を受けました。

そして本年の年次晩餐会にはネパール王国からネパール山岳協会のアンツェリン会長ら3名の出席をいただき、本年2月5日にグランドオーブンするボカラ国際山岳博物館にぜひおいでくださいとの

ことでした。これからは国際化の時代として、本会の果たすべき役割の重さを強く感じました。

さて、100周年を迎えるにあたって最も大切なことは「協調と融和」の精神で、全員で100周年を成功させなくてはなりません。そして、これからの日本山岳会はどうしたらよいのか、英知をもつて皆様と議論を深め、しかるべき方向を見出したいと思うのです。

いずれにせよ、来たるべき100周年に対しては、今までの「実績と伝統」をかみしめ、次に来る100年に対しては、会には「格

式と誇り」を、そして会員には「名誉と自信」をもった出発点にしていただきたいと思います。

本年もまた、よろしくご指導、ご協力をお願い申し上げます。



2004年(平成16年)
1月号(No. 704)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

新春を迎えて……………	1
平成15年度年次晩餐会……………	2
秩父宮記念山岳賞受賞……………	4
追悼・故藤平正夫元会長……………	5
100周年ニュース……………	6
海外の山……………	7
報告……………	8
海外・金子民雄氏講演会／事業・冬富士山雪上訓練講習会／山の自然学・中央構造線断層露頭研修	
支部だより……………	10
秋田／山形／宮崎	
Climbing & Medicine……………	29
東山南北……………	14
ヴァレ・ド・ジュウの休日／北海道主脈縦走から中央分水嶺踏査へ／『山』東山南北の歴史を逆上ると	
図書受入報告／新入会員……………	16
会務報告……………	17
ルーム日誌……………	18
INFORMATION……………	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10～20時
水・金…………… 13～20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10～18時

平成15年度年次晩餐会 「100周年」ひしひしと

■皇太子殿下、3年ぶりご出席

平成15年度の年次晩餐会が12月6日、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール3階「北辰」で開かれた。皇太子殿下がご忙しい公務のなか、3年ぶりにご出席されたのはじめ508人の会員が出席。来賓として、ネパール山岳協会のアンツェリン・シェールパ会長らをお招きした。

創立100周年を2年後に控えて記念事業の紹介もあり、「100



恒例の鏡開き

0周年」をひしひしと感じた晩餐会だった。

■会長挨拶

冒頭、平山善吉会長は、会長として初めて晩餐会に臨み、次のように挨拶した。

一、10月初め、ブータン王国のワシントン観光局長が日本山岳会を訪問され、100周年に合わせ、現在登山禁止にしている山を3つぐらい開放したいと話された。中国登山協会の王主席からは、仲良く山登りをしようという話があった。

一、100周年事業は登山と文化活動の両面から展開する。登山は、海外をいくつか、国内では日本列島の分水嶺を踏破する。また、日本人の足跡を訪ねる海外トレッキングを実施したい。文化活動は百年史、新日本山嶽誌の編纂、英文ジャーナルの発行などだ。大切なことは、100周年以降をどうし

ていくかだ。シンポジウムを開き方針を決めていきたい。

■永年会員の紹介

60人の物故会員に対して黙祷した。ことしは佐々保雄、藤平正夫の元会長2人が逝去された。心からご冥福をお祈りしたい。

続いて新名誉会員が紹介され、新しく名誉会員になった大塚博美・前会長に平山会長が会員章を授与した。大塚・新名誉会員は「入会して63年になる。印象に残ることはマナスル登山に参加できたことだ。ヒマラヤ黄金時代だった。それから、諸先輩からご指導いただいた。ふところの深い、人材豊富なクラブだと思う。思い出はマナスルと仲間だ」と挨拶した。

新しい永年会員が発表された。連続して50年会員だった方々である。新永年会員は27人。うち、7人が出席し、平山会長から永年会員章が手渡された。新永年会員を代表し、静岡から出席された尾崎徳郎会員は「先輩、友人に指導してもらって、今日にいたった。50年は、あつという間だった」と挨拶した。

＜新永年会員＞

小林 智明 (4046)	横江 一郎 (4047)	坂井 真 (4048)	古原 和美 (4050)	阿部 克雄 (4052)	津田 康祐 (4064)	蔡 禮榮 (4071)	久保 三朗 (4079)	田島 汎 (4083)	廣瀬 幸治 (4088)	山口 克 (4089)	吉宗 俊一 (4090)	岩淵 泰郎 (4091)	石坂 久忠 (4101)	小谷 隆一 (4102)	佐々木 誠 (4104)	岡安 正光 (4109)	松田 雄一 (4111)	杉野目 浩 (4113)	太田 浩史 (4131)	小笠原三郎 (4132)	日下田 實 (4146)	大井 正一 (4148)	桃井 雅弘 (4154)	堤 甚五郎 (4162)	石田 国夫 (4163)	尾崎 徳郎 (4170)
--------------	--------------	-------------	--------------	--------------	--------------	-------------	--------------	-------------	--------------	-------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------



平山会長より大塚前会長に名誉会員の会員章を授与

秩父宮記念山岳賞

第6回秩父宮記念山岳賞は、中村保会員の「東チベット地方の踏査」と決まった。表彰式が行われた。中村会員は「勝手に「ヒマラヤの東」と名づけている。この地域には26回も足を運んだ。情報発信を心がけたところ、米国山岳会のアメリカン・アルパイン・ジャーナル2003に掲載されるなど、海外でも注目してくれた。きょうは、私の69歳の誕生日。こんなに嬉しいことはない」などと語った。続いて、新入会員の紹介。これは179人が新しく会員に加わった。代表して西村一利会員は「夢

のような会に入会して嬉しい。自然を愛する人の輪を広げていきたい」と挨拶した。

恒例の鏡開きは、平山会長のほか大塚博美、中村保、木下是雄、田中文男の各氏がおこなった。酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。いつもながら感謝したいと思います。斎藤惇生名誉会員の音頭で乾杯し会食にはいった。

会食をはさんで全国25支部会員の紹介があった。支部の活動は活発である。最大の関心事は、やはり100周年事業。「新日本山嶽誌」の編纂をほぼ終え、分水嶺踏破に取りかかっている。秋田や京都、富山、石川、福井支部などが前倒しで実行し始めている。東海支部は記念事業としてローツエ南壁への冬期世界初登攀に挑戦中だ。「いま、7000メートルにいます」と紹介された。

青森支部は、9月に全国支部懇談会を十和田湖で実施した。214人が参加した。来年は熊本支部が開催の予定である。各支部が紹介されるたびに会場のあちこちから応答の聲が上がり、それに拍手が重なった。

東農大・明大の海外登山報告

晩餐会に先立ち、午後2時30分から東京農業大学エヴェレスト・ローツエ環境登山、また明治大学山岳部・炉辺会のアンナプルナー峰南壁登頂の報告会があった。いずれも日本山岳会の海外登山基金助成対象登山である。東農大は、「エヴェレスト、ローツエへの登頂だけでなく、BC周辺の水質調査やゴミの回収など農大の専門性を活かして環境に配慮した登山を目指した」と、また明大は「明大山岳部8000メートル峰14座の完登をめざし、大学山岳部らしく、粘り強さでやり抜いた。14座完登は故植村直己先輩がエヴェレストに登頂して以来33年かかってやっと実現できた」と報告した。

第6回秩父宮山岳賞を受賞された中村保会員の講演があった。なんども「ヒマラヤの東」に足を踏み入れた。長江、メコン、サルウィンなどの大河の源流が集中し、6000メートル級の山々が林立している。「それらは、ほとんどが未踏峰であり、登っても登っても、なお登り切れないだろう」と、豊富なスライドで、この地域の素晴らしさを紹介された。

皇太子殿下が写真を特別出品

慶雲の間で、さまざまな催しがあった。100周年事業の紹介があり、日本列島の分水嶺踏破事業では、宗谷岬から佐多岬までの分水嶺を実線で記した大きな地形図を掲示、またプロジェクトで海外トレッキングが紹介された。

海外トレッキングは日本人の足跡をたどる旅だ。マナスル、チョモランマのほか、カナダ・アルバータ、スイス・アイガー、シベリア・サヤン山脈など多彩である。

恒例のアルパインフォトビデオクラブ写真展も開催された。写真展には皇太子殿下が特別出品された。奥秩父・国師ヶ岳から金峰山を望んだものと、樹林帯を撮影された2点。

深田久弥生誕100年を記念し、日本山岳会所蔵の著作も展示された。図書委員会編集の『深田久弥山の著作目録』には、178冊の著作が紹介されていた。

翌日の懇親山行は、東京・高尾山で行われた。

(写真・今村千秋、文・高橋重之)

秩父宮記念山岳賞を受賞して

中村 保

皇太子殿下ご臨席の年次晩餐会で、栄誉ある秩父宮記念山岳賞を賜ることができましたことは誠に光栄に存じます。平山会長以下理事の皆様、審査委員会の委員長、委員の諸先輩、ならびにご推薦くださった科学委員会、図書委員会、海外委員会のご高配に厚く御礼申し上げます。

私のようなキセル登山家を受賞に値するかどうか、嬉しさの裏に忸怩たるものがあります。30年近くも山登りから遠ざかり、長いブランクがあつたからです。

一橋大学山岳部時代から数年間、は尖鋭登山に熱中し、大先輩の吉沢一郎さんと南米アンデスにも出かけました。大学を卒業したての頃はヒマラヤを目指すために窮屈



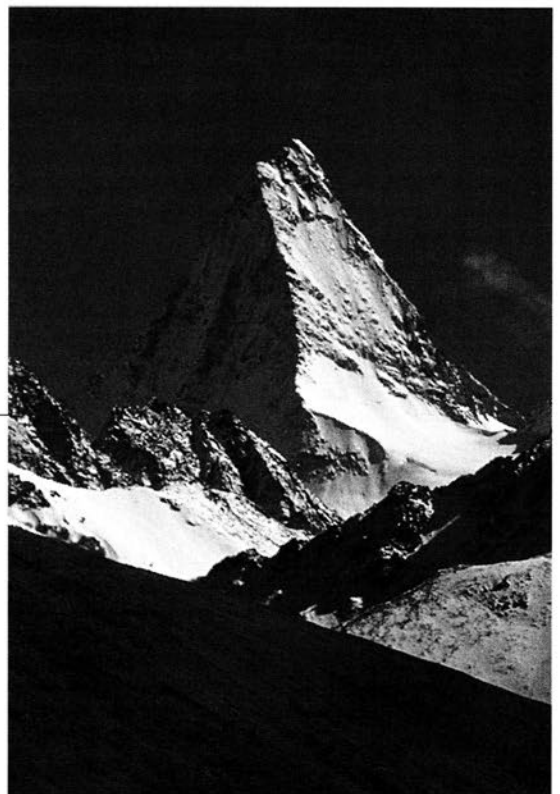
受賞の挨拶をする中村会員

なサラリーマン生活をやめて、憧れの的であつた京都大学に学士入学し学校の先生になろうかと真剣に迷いました。

しかし、決心がつくはずもなく、深田久弥さんの言葉通りになつてしまいました。

曰く、「ヒマラヤに行きたければ、1、大会社に勤めるな 2、佳人を娶るな」。深田スタンダードからすれば私は失格だったのでしよう。おかげで横道に逸れることなく、石川島播磨重工の企業戦士として海外ビジネスに挺身しました。山のほうは、日本の高度成長と軌を一にした日本隊のヒマラヤでの華々しい活躍を横目で見ていただけでした。キセル登山家の所以です。

幸い、香港に駐在していたとき、1990年に当時未開放地域だった玉龍雪山に出かけたことがきっかけとなり、中国南西通いが始まりました。大袈裟に言えば運命的な出逢いです。踏査の旅の回を重ねることに引き込まれていきまし



中村会員撮影のチベットのマッターホルン、カジャチョ(6447m・未踏)

た。東チベット・四川・雲南に広がる「ヒマラヤの東」の広大で複雑な未踏の山域に体系的に取組んできた先人は誰もいないことがわかるにつれ、自分が先駆者になろうという気負いも生まれ、今日まで26回も足を運び続けました。

同時に、海外への発信を精力的に行っていました。JACが2年前から発行している海外向け英文ジャーナル『Japanese Alpine News』を通じて「ヒマラヤの東」は海外に浸透しつつあります。文化や国民性の違いなのでしょうが、未知の領域に対する関心の持ち方は英国人やアメリカ人の方が

強いようです。

先般、朝日新聞に取上げていただきましたが、アメリカ山岳会はAAJで私の「ヒマラヤの東」特集に30ページを割いてくれました。100年の歴史をもつAAJ史上初めての由です。来年2月末にラスベガスで開かれるアメリカ山岳会の年次総会に招待され「ヒマラヤの東—チベットのアルプス」の講演をすることになっております。「ヒマラヤの東」には未踏の素晴らしい6000峰が数限りなく手付かずで残されています。探検的登山の最後の辺境にめぐりあえたことは幸運です。

追悼



故藤平正夫元会長

藤平さんを悼む

平井 一正

藤平さんの訃報を聞いたのは11月23日早朝のことであった。50年近く山や下界でお世話になった多くのことが思い出され、悲しみに言葉がなかった。

藤平さんが戦後の山岳界をリードする先駆的役割を果たしたことは改めて言うまでもない。富山高校時代から剣岳の開拓者として、兄彬文さんとともに名前はつとに有名であった。京大に進学したが、当時山岳部は休部状態であり、その再建に尽力された。1953年秋の今西壽雄さんを隊長とするAACK(京大学士山岳会)初のアンナプルナ遠征では、7100mに張ったテントが烈風のために破

れ、壮絶な退却の結果、見事に生還された。そのときの話を聞いたに畏敬の念に駆られ、大きな刺激を受けた。

それから5年後、1958年のAACKチヨゴリザ遠征では、藤平さんは見事に7654mの頂上に立った。私はそのときの幸運なパートナーであった。夕日に輝く頂上の岩の横で、頬を涙でぬらした藤平さんの笑顔を忘れることはできない。頂上からの帰り、吸い込まれそうな真つ暗な急斜面を、無限とも思われる確保の連続で下ったが、文字通り生死をかけた山行きであった。藤平さんの剛毅果敢な決断、沈着冷静な判断、大きな包容力に何度助けられたことだろう。そういう関係で藤平さんとは限りない信頼で結ばれた絆があり、通い合うものがあつた。

毎年夏に開かれるアンチヨコ会(アンナプルナ・チヨゴリザ会)や、祇園でのAACKシニアの新年会などで何度も顔を合せているが、「山とは自分の人生観の根底を成しているもの」と言い切った藤平さんの、山への深い愛情と執着心、さらに山への変わらぬ情熱に常に共感と感動を覚えた。AACKの

先輩連中の中でも藤平さんは生粋の登山家であり、また博識の文化人でもあつた。こんなすばらしい山の先輩とめぐりあつたことを感謝したい。藤平さんのご冥福を心から祈る。

藤平正夫元会長を偲んで

孫 慶錫

藤平正夫元会長が亡くなられたという報を聞いて本当にびっくりしました。11月24日のことです。

早速富山へ電話を掛けようと、古い、そして長く使っている手帳をめくりました。何とところどころに赤線が入っているのに再び何かに知れぬ寂しさを感じました。すでに織内さん、佐々元会長をはじめ多くの知己が他界されたことを、改めて50年近く使ったぼろぼろの電話帳から読み取ったからです。

藤平さんとの知遇は91年頃からだと思います。JACの副会長であられたので、松本市で開かれたUIAAの総会に私が韓国山岳会の副会長・代表として出席した折に、大森薫雄さんと鈴木郭之さんから紹介されました。それからは両国山岳会の交流親善の行事に

毎々楽しく語り合いました。

そして93年、藤平さんが会長になられてから、図らずもJACの名誉会員に推薦されました。あの年の年次晩餐会、皇太子様ご臨席の会場での思い出は、忘れられないものとなりました。今年でちょうど10年になります。

藤平さんが韓国へ来られ、ソウル近郊の北漢山に登つての両国岳人たちとの集い、HATJの雪岳山行に来韓されたこと、また東京多摩センターと韓国仁川でのアジア山岳連盟創設会合への出席等々、思い出は面影とともに昨日のことのように思い出されます。

私とJACとのお付き合いはもう43年になりました。その間、多くのご立派な方々が他界され、年輪の厚さを感じております。富山への旅も弔電のみ、墓参りののみとなりました。「今は静かに語りしめよ」のヒマラヤのエッセイを残して逝かれた藤平さんへは、地球人としてあの世での再会を待つことのみとなりました。

ご冥福を祈りながら、尽きせぬ思い出を偲びました。

(韓国山岳会元副会長・韓国登山文化院院長)

「中央分水嶺踏査登山」について

中央分水嶺踏査実行委員会委員長 石田 要久

創立100周年記念事業の主旨に沿った国内登山行事として、中央分水嶺踏査登山を実施することになった。これは、北海道の宗谷岬から九州の佐多岬まで中央分水嶺を踏査しようという試みである。JACの現状を踏まえて無理のない範囲で、ひとつの旗の下にできるだけ多くの区間をなるべく多くの会員で踏査することを目指した企画である。計画概要は以下のとおりである。

1. 目的

- (1) できるだけ多くの会員の参加
- (2) 多少なりともパイオニア的精神を生かせること (困難性を含む)
- (3) 少しでも参加者の連帯感がもてること (一本の線で結ぶ)
- (4) 今後のIT時代に相応しい企画を盛り込む
- (5) 可能であれば、その他の科学的または文化的要素を盛り込む

2. 登山計画

- (1) 各支部および首都圏の担当する区間を決定し、各区間について調査や予備的登山を通じて、次の3つに区分する
 - A. 登山道が整備されていて、それほどの困難さを伴わない区間
 - B. ある程度の藪こぎやザイルの使用などにより何とか行けるであろう区間、または積雪期なら行けるであろう区間
 - C. とても歩行は困難な区間

実際には、A区間は100%歩き、B区間は可能な限り歩くかまたはスキーで滑り、Cは線としては省くが、途中にあるピークや峠は点として可能な限り登る。

- (2) 実際の登山は担当の各支部に委ねるが、それぞれの実情に応じて次のような方法から選択するものとする。ただし、詳細な分水嶺のルートは各支部の検討に委ねることとする。

- ①自らの支部で全てを実施する。
- ②支部が中心となって実行するが、実際に歩く者やサポートする者は広く会員から募集する。
- ③支部が中心になってやるのには負担が大き過ぎ

て難しいが、本部が中心になって実行するのであればできる限りのサポートをする。

- ④今回設定している期間内での実行は困難なので、支部で以前に実施した県境登山などの報告書で代用し、今回は空白区間のみ試みる。

- ⑤実情ではとても実行 (協力を含めて) は困難。なお、中央分水嶺が通っていない、静岡・東海・富山・石川の各支部は近隣支部との協力などの形で、当計画へ参加することを前提としている。首都圏 (本部) は、群馬県などを中心に一部区間を担当し、近く同好会などへ参加を呼びかけることにしている。

3. 山行報告

主要な点のGPSによる測定、到出発時刻、三角点の保存状況と2万5千分の1の地図との相違点 (国土地理院に委員会を通して報告する予定) などを1日の山行につきA4に1枚で報告してもらう。提出された山行報告書は、パソコンに入力し、集大成したものを資料編として、CD-ROMで配布および保管する予定。また、この資料編をもとに最終報告書を作成する予定。

さらに、ホームページを最大限に利用し、進捗状況を常時公開する予定。

4. スケジュール案

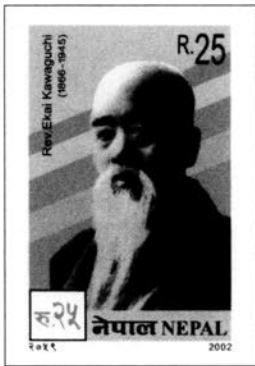
各支部へ全体計画を送付済みであり、2月22日に各支部の担当者を招集して最終調整の会議を催し、3月末までに実施計画の最終決定を行う。4月から2005年9月まで踏査登山を実行し、その後に報告書の作成に取りかかることを予定している。

なお、本号のインフォメーション欄にも記載されているように、今回の中央分水嶺踏査登山の計画とその意義を広く周知し理解してもらうためのシンポジウムを2月21日午後開催する。また、安全登山の一助とし、かつ調査に活かしていくため今回各支部にGPSを1台配布した。同じ機種 (地図の挿入可能) のものを47,800円 (定価59,800円・送料別、税なし) で販売しているので、希望者は事務局へ申し込んでいただきたい。

海外の山

ポカラ山岳博物館 と河口慧海

江本 嘉伸



2002年発行、ネパールの切手上的の慧海

「下句ポカラの山岳博のため慧海資料持参します」

ダウラギリ、アンナプルナ、マナスル山群と、ヒマラヤの高峰を一望できる「ポカラ国際山岳博物館」が来る2月5日、ついにオープンする。その展示に一世紀前、ヒマラヤを越えてチベットに入り『チベット旅行記』を書いた日本人僧、河口慧海がひと役買うこととなつたらしい。

通知をくださった河口慧海研究で知られる高山龍三・元京都文教大教授に聞いてみると、新しい博物館には慧海のコナーができるとのこと。

すでに高山氏が編集した『河口慧海著作集』(全17巻)などは送付済み、今回は、当時河口がネパールの大王に贈った一切を持参する予定という。慧海といえば、まずチベットが頭に浮かぶが、実はネパールとの交流に大きな役割を果たした人だった、という事実は広くは知られていない。

河口慧海は、1899年、日本人として初めてネパールに入国、1900年7月、ダウラギリをのぞむ峠を越えてチベットに密入国し、1901年3月ラサに着了いた。1年後身分が露見して出国、ネパールに再入国した時を含めて前後4回、通算2年半、ネパールに滞在している。

高山氏は、著書『河口慧海一人と旅と業績』(大明堂)で「河口慧海とネパール」「大王への覚書と献上蔵経」などの章をあて、この間の動きを追っている。チャンドラ・シヤムシエル大王(当時の首相)に直訴して慧海のため投獄されたチベット人たちの救出に動いてもらったこと、ネパールの国情などについては慧海自身も書き残しているが、一世紀も前、ネパールというヒマラヤの小国の人々と交流を持ち、時には近代化への具体的助言もしたことなど、具体的な史実が盛り込まれている。

ところで、慧海がネパールであらためて注目された理由のひとつは、2002年に日本、ネパールの双方で開かれた「日本・ネパール留学生交流100周年記念シンポジウム」だった。1902年6月、18歳から27歳まで8人のネパール人留学生が17人の付き人とともに初めて来日したことを記念してのものだ(筆者は参加できなかったが、松田雄一会員から資料をいただいた)。

一世紀前、ネパール政府が留学生を日本に送り込んだのは、1894年8月から翌年3月まで続いた日清戦争で日本が大国・中国を破つて世界中を驚かせたことに発したらしい。学生たちは、日本で兵器製造、機械工学、鉱山学、農業などネパール近代化のために役立つ学問を修める目的で派遣され、東大、東工大などで学んだのである。

この際、日本に帰国していた慧海は、シヤムシエル大王の依頼で東京で留学生たちと会い、彼らの実情を大王に報告した。ネパールの民謡を歌う河口に、留学生は驚き、感激したという。留学生たちは帰国にあたり、柿、栗、藤、菊の苗木をネパールに持ち帰った。

100周年を記念するシンポは、カ

トマンズ、京都、東京と3か所で開かれ、高山氏は4月7日、カトマンズで「河口慧海と日本ネパール文化交流ことはじめ」と題して講演をした。

慧海は『Three Years in Tibet』の書名で、英語でもチベット旅行記を出しており、海外では早くから知られた存在でもあった。チベット語の師、チャンドラ・ダスが英国の情報員であったことから、英国、ロシアなどでは「情報」の面からも注目されていた。とりわけ1902年冬、ラサ郊外でロシア製の銃器を積んだラクダ200頭を見た、という情報は、1904年のヤングハズバンドのチベット武力進攻の引き金になったとされる。その日から100年がたった。ネパール政府が河口慧海を重視したことは、この年の12月、慧海の切手を発行したことでうかがえる。

ポカラの山岳博物館には、2人の日本人コナーができる。マナスルに初登頂した今西壽雄・元日本山岳会会長と、河口慧海である。

私たちは意外に近代史を知らない。地元ネパールの人々にとっても、訪れる観光客にとっても、ひとつの発見の場となれば、と思う。

報告

1月

Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

海外委員会

金子民雄氏講演会

11月5日、学習院大学百周年記念会館で中央アジア、西域等の研究で著名な金子民雄氏を講師に迎え「西域とグレイトゲーム」という演題で講演会を開催した。

1985年、海外委員会(当時担当理事、鈴木郭之)では、中央アジア探検家列伝を聴講者を限定したゼミナール形式で5回にわたって①F・E・ヤングハズバンド(金子民雄)、②N・M・ブルジェワルスキー(田村俊介)、③R・C・F・シヨンバーク(広島三朗)、④大谷探検隊(片山章雄)、⑤趙爾豊(水野勉)の諸氏に講演をいただき、これに金子氏の1984年の講演「A・スタイン」を加え「中央アジア探検家列伝」と

いうタイトルで講演録をまとめ、受講者に配布し好評を博した。

当時、この企画の一翼を担っていた田村俊介氏が新任の担当理事に就任したと、前任の中村保担当理事が中央アジアにおける探検と諜報活動というテーマで金子氏の講演企画をあたためていた背景もあり、氏の講演会が実現した。当日、雨模様にもかかわらず、84名の聴衆を得、絹川祥夫委員長の司会進行、田村理事による金子氏のプロフィール紹介でスタートした。

氏の手による中央アジア、西域に関する著作は多く、昨年岩波書店から『西域・探検の世紀』が出版されたこともあり、多くは同書等に譲るということで、活字にならなかった部分を抽出して披露して下さった。氏は、「グレイトゲ

ームというのは、簡単に言えば、中央アジアという大きな土俵の上で英露両大国ががっぷり四つに組んだ、大勝負といったぐらいの意味である。しかし表面的には決して銃火を交えず、あくまで穏やかであるが、それでいて裏面では激しく動きを見せるのがグレイトゲームの特徴であった。

この微妙な時期がまた西域探検の最盛期にも当たっていたのである。一般に情報・外交戦と探検調査とはまったく無関係に見えるが、実はお互い極めて密接な関わりを持っていた。探検は純粋な学問的研究であった反面、高度な情報収集作業であったのである。だからこそ各国は莫大な探検資金を惜しみなく出したのである」と書いておられる。

近年、河口慧海に関する史料が神田の古本市に出、それが東洋大学図書館に収まり、依頼を受け目にする機会を得た。大学ノートに書かれた自筆の書簡の下書きであったニュースから慧海に触れられ、慧海のチベットの語教師サラット・チャンドラ・ダスは英国側の密偵で、慧海のもたらすロシア使節団や武器工場に関する情報がダス

通じて英国側にもたらされ、後年のヤングハズバンド等のチベットの使節団に繋がる。

ラサ入城後、ヤングハズバンドやオコーナー等がダスや慧海の身許が露見して奇禍にあった人々を救ったことも、慧海自身にスパイという認識はなかったかもしれないが英国側が巧みに利用していたことを物語っている。チベットに入ったほかの日本人と慧海とが不仲であったが、それは慧海の役割を知っていたからだろうと類推された。

英国、ロシア等がスパイと思っていた大谷光瑞の西本願寺隊のみが純粋な仏教ミッションであり、グレイトゲームには参画していなかった。オクサス探検で有名なインド省のカーゾン卿が「チベットの問題はリトルゲームだ」と述べたのは、グレイトゲームに対比したのであろう。

印象に残った部分を記してみたが、専門的になるとものが見えなくなる登山隊や探検隊の人々には百科辞典的な知識が必要であると述べられた点は耳が痛い。また、アラビアンナイトの全訳本とキプリングの『キム』には挑戦する必



佐藤小屋で講師陣とともに

事業委員会

冬富士山雪上訓練講習会

要がありそうだ。
氏の数十年におよぶ中央アジア、西域、チベット等に関する研鑽が、氏を中心に知のサークルを形成し、多くの後進を啓発していることに心より感謝を申し上げたい。

(伊丹 紹泰)

富士吉田口5合目佐藤小屋を基地に、コーチを含め12名の参加で開講(11月28〜30日)された。この講習会は04年カングリシヤール隊参加者の第1回雪上訓練も兼ねた。入山初日は夕食後の机上講習、全員ハーネスを持って集合、着装、

結び方、種々のロープワークを教わる。

2日目朝から雨、6時半準備体操をして出発。小屋裏の石段の積雪も雨でグチャグチャ、アイゼンなしで雨の中7合目手前まで登る。雨足強く、少し下ったところの小さな雪面で訓練開始。雪斜面の登下、滑降停止等を1時間ほどやるもますます雨強くなり雪上での講習を中止、小屋に戻り屋内講習にする。負傷者の救助、確保の色々、スタンディングアックススビレイ、コンティニアスによる氷河歩行時のクレバス転落時の確保など、配布された資料を見ながらザイル、カラビナ、エイト環、シュリングなどを使い、レベルの高い最新技術を実技中心に皆熱心に学んだ。

松原講師の長年の経験から使い勝手の良い道具などいろいろ話していただき大変参考になった。

午後はヒマラヤ登山を前提とした講習。講師自身の豊富な経験から高山病や高所順応トレーニング法、またヒマラヤ登山で特に必要なユマールによる登攀、エイト環等による下降法など部屋中にザイルを張り巡らして2人の補助講師

の手足をアンカー代わりに実技本位でわかりやすく説明、多くのことを学ぶことができた。

3日目の登頂予定は台風の接近もあり天気回復の見込みなしと判断し、明朝解散とする旨、皆に了解してもらった。おかげで懇親会は追加のお酒も加わり遅くまで盛り上がった。

雨の冬富士、記念写真も部屋の中。雪上訓練はほとんどできなかったが、その分充実した屋内講習ができたと思う。

松原講師および橋原、北口両補助講師ありがとうございました。佐藤小屋での食事は美味しく佐藤ご夫妻には大変お世話になりました。(中原 良材)

山の自然学研究会

中央構造線断層露頭研修

11月3、4日、中央構造線露頭の研修会が行われた。会員でない小生は、会報『山』のINFORMATION欄に掲載された募集を見て申し込んだところ、皆さんの歓迎を頂戴し、即日入会となり、『山』に報告を書くはめとなった。

地学に全く無知の小生は、以前

は中央構造線はフォッサマグナのことかと思っていた。恥ずかしながら、フォッサマグナ(大陥没帯)の西縁が糸魚川―静岡構造線で、中央構造線とは別ものであることを知ったのは最近である。中央構造線は、関東から中部、近畿、四国を通り、九州に至る全長1000kmを超える我が国最大最長の大断層である。「あれ、構造線って断層のこと?」と疑問に思う方もおられるでしょうが、断層の大きなものを構造線というそうである。

研修会に参加した7名は、中央高速道路を諏訪インターで降りて



個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



杖突街道を南下し、杖突峠と分杭峠の中間にある長野県長谷村の溝口露頭を見学した。ここでは美和湖の上流にみことな断層が露頭している。小生は糸魚川―静岡構造線が見られるという糸魚川市のフ

オッサマグナ・ミュージアムの近くの露頭を見学したとき、岩面がコンクリートで覆われていて失望したことがあったが、ここは文字通り露頭で、感激した。残念なことに説明パネルが不完全で、どの層が内帯(日本海側、領家帯ともいう)か外帯(太平洋側、三波川帯ともいう)か対応が分り難い。

次にさらに南下して、大鹿村の北川露頭を見学した。ここには大きな写真のパネルがあり、実風景との対応が付き、内帯と外帯の区別がついた。ところが両帯の間に幅1メートルほどの層があり、これが何

だか分らず、釈然としない。ぼつぼつ降っていた雨が激しくなってきた頃、ちょうど大鹿村の中央構造線博物館にたどり着いた。博物館の河本氏が館内を詳しく案内してくださった。例の内帯と外帯の間にあるいくつかの層について、地層が形成された後にマグマの活動によって形成された貫入岩

や、2つの層が擦られて出来た断層粘土といわれるものであるとの説明を受けた。

興味尽きない博物館を後にして、今夜の宿、大鹿村塩湯温泉山景館に着く。ひと風呂浴びてから、白木会員の「フオッサマグナ要素植物群」についてのレクチャー。詳しくは、山の自然学研究会・研究報告書第2号をご覧いただきたい。勉強の後は、よき料理と旨き酒で一同大満足というまでもない。

翌日、最後の見学地、3つの露頭のなかでは最大の安康露頭を訪ねた。博物館での勉強のおかげで一応理解することができて、全員納得。露頭の近くに天然グミの木があり、天の恵みをありがたく頂戴した。今回の例会にグミ酒にして来るという宿題を新人の小生は頂戴した。

露頭の見学の後、紅葉真っ盛りの鳥倉林道を歩いて、南アルプス(赤石山脈)の背骨にあたる岩層を見に行き、帰路に着いた。

今回の三露頭を見て、日本列島の形成の起源を見た思いだった。研修の詳細は、小生のホームページ(www.nishida-s.com)に掲載する予定である。(西田 進)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

秋田支部

中央分水嶺踏査登山 真昼山系・中ノ沢岳と風鞍

当支部における夏山山行は、9月17日、奥羽脊稜山脈の和賀岳と真昼岳との中間付近に位置する中ノ沢岳(1061メートル)と風鞍(1023メートル)において、会員15名の参加のもとに実施した。

この両山への登山道は、数年前に切り開かれたが、自然保護の問題で一時中断、平成14年に再開され、昨年ようやく完成したばかりである。

この開通により、和賀岳から真昼岳を経てさらに女神岳(956メートル)までの大縦走路が実現され、



南風鞍山頂にて

新鮮味のある山として今後注目をあびそうである。

今回の登山は、全員の縦走をめざし、万が一の引き返しも考慮して、入山口での車交換による交差登山とした。

小路又側からは川口リーダーほか7名、真昼峰越林道側からは柳田リーダーほか6名が入り、中間地の二等三角点の山・南風鞍(1020メートル)で合流し、晴天のもとに1時間半近くに及ぶ宴会となった。両班ともに約10時間の縦走であったが、本会の創立100周年記念事業となった「中央分水嶺踏査登山」を前倒ししての山行でもあり、佐藤安会員がGPS測定を担当

当し、これまでの登山とはひと味違った山行となった。参加者一同、奥羽山荘で汗を流し遅い帰秋となった。

また、10月19日には、引き続き真昼峰越林道側から鎌田リーダーほか13名が真昼岳に登り、うち9名が兎平を経て女神山へ縦走して善知鳥に下山。真昼岳から引き返していただいた小笠原支援リーダーほか3名と合流し、無事踏査登山を終了した。

(佐々木 民秀)

紅葉山行に参加して

来年は四国の山を、と計画していた秋田支部の一行7名は、前倒しで急遽事業委員会主催の紅葉山行「四国の最高峰を目指して」に参加させていただいた。

10月10日、ANA631便は定時に離陸し、まもなく機内からは富士山がくつきりと眺められた。高松空港に降りると陽射しも柔らかく、暖かくこの天気があと2日もつてくれるよう願う。バスで大歩危、祖谷のかずら橋を観光し、祖谷溪の崖の上の「秘境の湯」に着く。剣山を源流に祖谷川が四国山地をV字型に刻んでできたこの

溪谷、我々の地域ではほとんど見かけないスケールで、さらに急斜面の上の方まで民家が建ち、畑を耕しているのに驚いてしまう。

11日、剣山へと出発してまもなく標高が上がるに従ってガスが濃くなる。見ノ越で雨具を着けて出発。リフトの下のリンドウが鮮やかだ。西島からの登山道にはミミズがうようよと出てきてちよつと気味が悪い。

山頂は横なぐりの雨風が強い。記念写真もそこそこ下山とする。昔はこの山頂部もミヤマクマザサで緑一色だったとか、リフトで手軽に楽しめるようになった人災か、山頂部の裸地化が目立った。今日もバスの移動は長い、初めての南国風景は飽きることを知らない。面河国民宿舎泊。

12日朝、雨は小降りである。石鎚山スカイラインは、高度が上がるにしたがつて紅葉が岩に映える。標高1492mの土小屋駐車場には四国の会員2名が迎えてくれ、登山決行となる。この標高での雨だが、それでも寒さはほとんど感じない、やはり南国なのだ。

山頂まで4・6km余り、なだらかで木道も良く整備されており歩

きやすい。時折ガスの晴れ間から岩峰に紅葉が映え幻想的だ。いよいよ鎮場に到着。高さは約50mとか、雨で濡れているしどうしようか考えた後、取りあえず登ってみることにした。リーダーのサポートを得て二の鎖は無事に通過、三の鎖は上が見えないので全く自信なし、巻き道を登る。

10時30分弥山到着。それから天狗岳へ。ガスで展望が良くないので行けたもののスリル満点の行動だった。山頂白石小屋で昼食。下山は、昨夜泊った面河溪谷へ下る面河山道。

12時30分出発。山腹をトラバースする道は、いたるところに木道が敷かれているが、今はあまり利用されていないのか、かなり荒れており、注意を要した。

クマザサから四国シラベの原生林をぬけ、面河溪谷へと続くこのコースは深山幽谷の趣を余すところなく、石鎚山の一面に会えたような気がした。

雨には降られたものの、西日本の最高峰石鎚山と剣山、2つの山を登り、道後温泉で打ち上げ、四国の旅を終える。事業委員の皆様はじめ参加会員の皆様ありがとうございました。

ございました。

(福田 光子)

山形支部

三本槍岳山行 三斗小屋温泉に泊まる

遠い昔、山岳雑誌に掲載された山の温泉宿の風景。板の縁の浴槽と木枠のガラス窓、その窓から紅葉の山々が見え、午後の斜光が差し込んでいる。古びてはいるが心温まるような、そして少しもの悲しいような温泉宿の写真が目についた。それ以来いつかこの三斗小屋を訪ねてみたいと思っ

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

ていた。

期せずしてその機会に恵まれた。

今秋の山形支部の山行は三本槍、しかも三斗小屋温泉泊まりである。早速申し込み、参加した。

10月18日、紅葉期の第3土曜日、しかも秋晴れとあって峠の茶屋あたりはかなりの賑わいであった。駐車場で合流、参加者10名で出発。穏やかな小石の道を歩いて1時間ほどで峠の茶屋跡避難小屋に着く。右手にアルペンムードたっぷりの豪快な朝日岳。左手には噴煙を上げるどっしりした茶臼岳。小休止をしてしばし展望を楽しむ。剣が峯の右側をトラバースして岩稜帯を行くと朝日岳の肩に出る。荷物



念願の古色蒼然とした山の宿に泊まる

Climbing & Medicine · 29

登山とバランス能力

山本 正嘉

中高年登山者の事故が増えていますが、その約半数は転倒、転落、滑落といった「転ぶ」ことに関係したものです。バス・ハイキングで目的地に到着し、バスのタラップを降りるときに転んで骨折、病院行きという笑うに笑えない話もあるほどです。

このような事故にはバランス能力の低下が関わっています。歳をとると筋力、持久力、敏捷性といった体力がすべて低下していきませんが、中でもバランス能力は最も著しく低下します。60歳になると、バランス能力は若い人の3分の1くらいになってしまいます。

転倒事故は、今や一般社会でも深刻な問題となっています。日常生活で転倒、骨折し、寝たきりになる高齢者が増えているのです。日常生活では平らで固い地面を歩くので、条件には恵まれています。しかし登山の場合は、斜面、柔らかい地面、そして高所（低酸素）環境と、バランス能力を低下させる原因がたくさんありますから、普段に増して注意が必要です。

最近私が行った実験によると、平らな地面でのバランス能力を100%とすると、登り斜面では43%、下り斜面では52%、また斜面に横向きに立つ場合は、谷足立ちのときで47%、山足立ちのときでは11%まで低下してしまいます。同様に、柔らかい地面では固い地面の66%、標高4000mの高所では低所の73%となります。このように、山では日常生活では考えられないほどバランス能力が低下してしまうのです。

では、どうしたらバランス能力を向上させることができるのでしょうか。バランス能力には、神経系の能力だけでなく、身体を支える脚の筋力も関わっています。ここでは、それらを同時に鍛える簡単なトレーニング法を紹介します。

座布団の上で、片足で立つ訓練をします。慣れないとぐらぐらしますが、それを我慢して立ち続けることによって、バランス能力と脚力が同時に鍛えられます。毎日、この片足立ちトレーニングを左右交互に15秒間ずつ、5セットやってみましょう。

慣れて物足りなくなってきたら、時間やセット数を増やしたり、腰に手を当てる、座布団を厚くする、目をつぶるなど、課題を難しくしてみましょう。家でテレビを見たり、ラジオを聴きながらやれば長続きするでしょう。

(本稿の内容は第23回登山医学シンポジウムで発表されました)

お詫び：10、11月(701、702)号と、通し番号「26」で重複してしまいました。今月号で正規番号に戻します。

をデポして朝日岳を往復。

山頂は360度の大展望。1週間前が紅葉の最盛期だったところだが、中腹のすっかり葉を落とした灰白色の幹に枝先がオレンジ色にかすんでいる赤や黄色の色を残している木々、緑の笹……。晩秋の山も捨てがたいものがある。稜線上を進み、湿地の清水水平に下って北温泉分岐で昼食をとった。ドロドロの道をしばらく行くと急登で25分ほど登り三本槍岳山頂に着く。一等三角点を記憶に残し山頂をあとにした。雲行きが怪しくなってくる。熊見曾根、隠居倉を経て三斗小屋温泉に着いた。

大黒屋は古色蒼然とした山の宿屋であるが、板戸、古い柱、黒い天井板と懐しく、しかも浴場は清潔に手入れされていて、気持が良かった。

温泉は浴槽や窓枠が新しい感じだが、まさしくあの写真の風呂。やや混み合っていたが、透明のお湯の心地よさ。窓から寂しくなった紅葉、山のいで湯を満喫する。入浴後は今日の無事を祝い会員持

参のクラスミを肴にビールで乾杯。翌日も晴天。計画より早めに出発。昔、牛が硫黄を運んだ道という、樹林の木漏れ日の道をゆつくり帰路についた。

2日間とも天候に恵まれ、メンバーに恵まれ、念願であった山の温泉宿にも泊まることができ、よい山行ができた。(佐藤 映子)

宮崎支部

第19回宮崎ウエストン祭

祖母登山から113年

近代登山の父といわれた英国人宣教師ウォルター・ウエストン師が祖母山に登って113年(明治23年11月6日以来)の時が流れた。ここ高千穂町、JAC熊本、北九州、宮崎支部会員をはじめ山を愛する仲間175人が集い、ウエストン師を偲んだ。

式典は、児童代表による献花、点鐘に続き、高千穂町長の挨拶、井野元副支部長の音頭で「ウエストン師にささぐ、鎮魂と新たな誓い」の詩文を参加者全員で朗読

し、ウエストン師の冥福を祈り、自然とともに生きる新たな実践を誓い合った。また、ウメバチソウの咲く碑前で「エーデルワイスの歌」を合唱したあと、高千穂町およびJAC宮崎支部から五ヶ所小学校児童に記念品が贈られ、第19回宮崎ウエストン祭の幕を閉じた。式典終了後、赤川浦岳への記念登山は降雨激しく、断腸の思いで中止した。

盛り上がった前夜祭

ウエストン前夜祭は11月2日18時から五ヶ所野菜集荷センターで祖母ヶ嶽神社宮司による神事に続き、神楽が奉納されたあと太鼓の演奏、五ヶ所小学校児童の合唱などが披露され、参加した約600人は5杯にも積み上げられたキャノンファイアーの篝火を囲み、カッポ酒に頬を染めて酔いしれた。前夜祭終了後、五ヶ所集会所において熊本、北九州、宮崎の3支部会員の交歓会は大いに盛り上がりを見せ、次回の再会を約した。

定例山行・古祖母山登山

宮崎支部の11月定例山行は古祖母山(1633m)。ウエストン

師が登った祖母山と天狗岩、障子岳を眺望しようと、宮崎を午前5時30分出発。9時30分尾平越の登山道から急登をあえぎながら12時山頂着。時折降り注ぐ秋雨に祖母山は霧の中であつた。

石井久夫会員の祖母傾山系の植生の分布を聞きながら下山開始。下山の途中、8合目の展望所で霧の中に祖母山・天狗岩が突然現れ歓声が上がる。登山道の紅葉を堪能しながら15時30分登山口着。ウエストン祭・前夜祭参加のため五ヶ所高原へ急いだ。

(井野元 繁)

春のアンズの花と7,000m峰を仰ぎみる

桃源郷フンザと白い氷河と雪山展望ハイキング8日間

【フンザ2泊・グルミット1泊】

①3/19(金)発 248,000円 ②4/9(金)発 254,000円



ALPINE ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

ヴァレ・ド・ジューの休日

村井 葵

ジュラとはスイスとフランスの国境に連なる石灰岩の古期褶曲山脈のことである。アフリカプレート^①の沈みこみによりアルプスの造山活動が起こり、数多くの名峰が生み出されたことはよく知られている。ジュラとは地質学というジュラ紀のジュラ、「ジュラシック・パーク」のジュラでもある。その名に強く惹かれてジュー渓谷(ジューは古い言葉で森の意味)を訪ねた。スイスでは冬時間になった10月末、すでに積雪があり、ユングフラウ・ヨッホでは氷点下20度を告げていた。

ローザンヌから幹線を離れて北

に向かう。ル・デでローカル線に乗り継ぎ、ジュー湖畔を抜けてブラッシュまで1時間強、スイスでもっとも寒いという村に降り立った。

雪混りの登路を地元のローランに案内されてダン・デ・ブリオン(双頭の獣の牙)に登った。モミ林にカモシカの親子を観た。雲海に閉ざされたレマン湖の彼方にモン・ブラン山塊が浮かび上がっていた。

ジュー渓谷に滞在中、ジャーナリストのデガイエさんが四輪駆動のパジエロを巧みに操って、標高1300^②の高原に運んでくれた。そこには中生代の地表が露出していた。新雪に覆われたいかにも古い岩層をはがしていくと、計らずも1億4千万年前の三葉虫の化石

を発見した。悠久の昔の生命体との出会いに驚喜した一瞬であった。ふと太古の海の堆石物であるエヴエレストのイエロー・バンドを思い起こしていた。旅に力添えしてくれたレッツ・スイスに感謝しつつ山をおりた。

ジューに滞在中、想像を絶する鍾乳洞を観た。ジュー湖(標高1005^③)の水は良質で時計の精密工業が盛んでもある。鉄道に「時計学校」の駅名があるほどで、日本人職人も10人いると聞いた。

オルベ川が縦10^④ほどのジュー湖に入り、そこを出た流れが大障壁にぶち当たっている。その岩壁にぽっかり大きな穴があき、流れが吸い込まれている。身がすくむほどの水量が岩の中に姿を消しているのだ。そして延々7^⑤もの岩の洞窟をくぐり抜けて、高さにして240^⑥を流れ落ち、標高760^⑦地点に吹き出しているのだ。

10月末、好奇心にかられて最近整備された鍾乳洞を観に行った。説明員に伴われて往復1^⑧の洞窟を探索した。暗い岩壁の中を荒れ狂う奔流が走っていた。滝になって逆巻き、複雑な起伏のなかを右に左に渦巻いていた。たくましく

生き続けてくれている地球の内臓を見る思いであった。

2^⑨以上に成長した石筍を見た。2^⑩伸びるのに100年かかると聞いて息を呑んだ。鍾乳石が垂れ、石筍と合体したものもあった。水滴を舐めると塩辛い海の香りがした。まだ未知の洞窟は6^⑪を残していると言明員が語った。

水に侵食されやすい石灰岩とはいえ、この巨大な水路がどうしてできたのか不思議であった。氷河期、いやそれ以前の海底にある頃から、大自然の緻密で計画性のある営みが続けられていたのかもしれない。

10年ほど前、ベルナー・オーバーラントのウエンゲンにいた時、大雪で行動できないのでトゥルメルバッハの大滝を観に行つたことがあった。それはユングフラウの下部大岩壁の内部を落下する有名な瀑布であった。垂直に乱舞する大滝は見応えがあり、はらわたをえぐられるようで、目まいを感じたのを覚えている。しかしヴァロルブの洞窟の奔流はそれ以上のスケールを備えていた。収穫の多いレッツ・スイスの旅を終え、ジュネーブにおりた。

北海道主脈縦走から 中央分水嶺踏査へ

新妻 徹

日本の最北端「宗谷岬」から宗

谷丘陵→北見山地→大雪山系→日高山脈→襟裳岬と続く北海道の背骨となる主脈を縦走したい。その夢はどうやって実現できるか。グループ山行で踏査し、登頂を点とすれば、点と点を結ぶ線(縦走)を山域別に実行し、サポーター隊を編成して組織的に動いてきた。問題は「宗谷岬からの南下」か「襟裳岬からの北上」であったが、厳しい主脈である日高山脈を、あえてラスト・パートとし、仲間たちと「ドリーム・プロジェクト」を組んだ。社会人山岳会のメンバーで長期山行は無理なので、土、日曜の行動が多く、主脈へのアプローチに時間を要し、ブッシュにはばまれハイマツ帯にさえぎられて積雪期以外は困難が多い。

北大から名寄農高へ転動し、昭和34年に名寄山岳会を設立。その仲間と36年1月から宗谷岬をスタートし、7区間に分けて土、日曜山行で3月にピヤシリ山に到達し

た。ノン・サポーターの単独パーティーでロングランを展開したいと思った。札幌北高に転動して、日本山岳会の岳友たちと53年末から再度宗谷岬を起点とし南下トレースを続行している。

第10次(56年3月)函岳、第38次(61年9月)天塩岳、第47次(平成1年3月)チトカニウシ山、第68次(5年5月)武利岳を通過し、夏道のある石狩岳→トムラウシ山→十勝岳をクリアして待望の日高山脈に入り、昨年7月1日にペタガリ岳に到達した。

私は72歳であり、そろそろ主脈南下縦走を完結させたいと思っているが、100周年山行として「中央分水嶺踏査」が話題になってきた。科学委員会案は、宗谷岬→日高山脈分岐→樽前山→道南(大千軒岳)→白神岬となっている。

約25000キロの日本列島を日本山岳会の25支部で、各100キロずつ分担するとする。1回の山行で10キロのトレースとすれば、2005年1月から10月までの10回の山行で線を引けないだろうか。全くアバウトな計算であるが、北海道の宗谷岬→白神岬は約400キロであり、道北、道東、道央、道南の

4地区で1000キロの分担となる。

昨年12月6日の支部長会議で各支部にGPSが与えられた。国土地理院の地図は日本測地系から世界測地系へ移行中であり、中央分水嶺の緯度、経度の測定は、地図との誤差を確認する視点からもタイムリーな事業と思う。

私は約40年前に宗谷岬をスタートしたが、携帯電話もデジカメもなかった。マイカーもなくEPガスもなかった。「二十一世紀の登山はいかにあるべきか」という声を聞くが、2005年元旦には3度目になる宗谷岬に立ち、中央分

水嶺に線を引く姿勢を維持したい。各支部と交信しながら踏査行を続けたものである。

『山』東西南北の 歴史を逆上ると

早乙女 緩次

まずは会が発足して間もなく100周年という記念すべき節目の年を迎えることを喜びたい。ここに月々刊行される『山』の源を探りひもとくと次のようになろう。今日の『山』の源泉的な記述は

▲世界的に類を見ない貴重な探検記録

禁断のアフガーニスタン・パミール紀行

ビクトリア湖畔

——ワハーン回廊の山・湖・人——

平位 剛 著

A5判 480頁 定価3,800円

地政的理由から永らく外国人の入域が閉ざされていたアフガーニスタン東北部に盲腸のように突出するワハーン回廊へ故マスード將軍に庇護され、1999～2001年の3年間探検に入った世界的に類を見ない貴重な探検記録。



◎好評発売中!!

定価(本体33,000円+税)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図

(付)カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著 ・カテゴリーを請求下さい

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

明治42年刊行の『山岳』第4年2号の「会員通信」のなかに「会員及び読者諸氏よりの通信を載す、何に限らず、寄せるべし」と記されている。しかししばらくの間は「会員登山報」と記載され第9年第3号までである。この源泉も次第には大きな池となって、水流に変わり、今日のような独立した出版物の出現となったのは昭和6年からであった。

『山岳』第26年第1号のなかに「会報の発行」として「従来、会員との連絡は年3回の『山岳』の発行、年4回の小集会などを以て維持されてきたのであるが、なお不足の感を免れないので、昭和5年10月から会報を発行し会員各位に配付することにした。大體に於いて月刊にしてゆく方針であるが、原稿其他の都合で時に隔月となることもある。内容に付いては既に配付せられたる会報によって御承知のことと思ふ。会員諸氏が会報を今後大いに利用せられることを希望してやまない」とある。

この告知によって、以来「会報」と称せられて257号まで続けられたのが、1968(昭和46)年発行の『山岳』第62年のなかに記

されてある。特に「会報」時代は戦争、敗戦という紆余曲折の過酷な時代を過ごさねばならなかった。『山』の歴史の過程を川になぞらえれば、物資、人材等が不足という不運につきまとわれ続け、発行状況もある年や期間には枯渇し、定かなものではなかったからだ。同じ年の次号258号からはようやく今日我々一般がお目にかかる『山』へと改名されてきて、年に12回という極めて安定した配付に変わった。なかでも「東西南北」が設けられ開放されたのは、時に1978(昭和53)年4月から配付394号からであった。

さて、先ごろのカラー印刷によれば『山』は今日では700号を数えるまでになったという。会員諸氏の唯一の投稿の場でもある『山』のなかの「東西南北」への気軽であるはずの発表も、近年に至っては会員の増加にもよるのであろうが、微妙な変化も現れている。最近になって「……1点につき1000字程度でお願いしまし」とあるから、投稿も会員数に対しては逆比例現象も起こりつつあるから、何ともますます世知辛く狭き門なのが実情である。

図書受入報告 (2003年11月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
信州大学山岳科学総合研究所(編)	山に学ぶ山と生きる(山岳科学叢書 No.1)	270pp/21cm	信濃毎日新聞社	2003	発行者寄贈
信州大学山岳科学総合研究所(編)	山と里を活かす(山岳科学叢書 No.2)	235pp/21cm	信濃毎日新聞社	2003	発行者寄贈
日本山岳協会(編)	山岳指導者指導要項	104pp/30cm	日本山岳協会	2003	発行者寄贈
ジム・カーン(著) 倉知敬(訳)	冒険の達人: クリス・ボニントンの登山と人生	325pp/22cm	茗溪堂	2003	発行者寄贈
権藤司(編)	山から始まる自然保護: 山の自然学クラブ会報、山の自然学講座講義録	262pp/30cm	山の自然学クラブ	2003	発行者寄贈
日本山岳会図書委員会(編)	深田久弥 山の著作目録	23pp/21cm	日本山岳会図書委員会	2003	発行者寄贈
矢原徹一(監修) 永田芳男(写真)	絶滅危惧植物図鑑: レッドデータプランツ (ヤマケイ情報箱)	719p/21cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈

訂正とお詫び

2003年の会員名簿、45ページの井上公利氏の終身会員を示す「L」の表記が1行下にずれてしまいました。訂正してお詫び申し上げます。

創立100周年記念登山・冬期ローツェ南壁登山隊(東海支部)は、荒天に阻まれ12月18日をもって撤退を決めました。詳細については改めてご報告いたします。

会務報告

11月理事会

日時 11月12日18時30分～20時15分

分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 平山会長、芳賀、橋本各副会長、藤本、小川、朴元、大蔵、賛田、田村、黒川、鈴木、野口、篠崎、鳥居各理事、内田、一力各監事、宮崎、鰐坂、小倉(董)、西村、重廣各常任評議員
〔委任〕 平林副会長、今村、石田各理事

【報告事項】

以下の件を報告し承認された。

1 会報『山』11月号の内容について 代理・藤本

11月号のゲラが回覧された。ゲラの内容をチェックするために、理事会開催の前に机の上に置き各理事がチェックしてはどうかとの意見があった。

篠崎理事より会報『山』に掲載された記事が紙面の都合で一部削除されて、主張すべき点十分に反映されなかった。今後削除する場合は筆者に確認して欲しいとの

要望あり。会報担当理事が欠席していたので、来月の理事会で検討することとした。

2 名誉会員推薦の件 藤本

評議員会において本年度の名誉会員に大塚博美氏を決定した。

3 サンビュウハイツ四番町201号室購入の件 橋本

サンビュウハイツ四番町201号室の購入手続きを完了した。等価交換の交渉は継続中である。

4 『新日本山嶽誌』発刊企画を100周年記念に加える件 藤本

『新日本山嶽誌』を発刊する企画を創立100周年記念事業に加える。記念史刊行委員会所属。早い機会に会報『山』に掲載する。

5 パソコンシステム・3年リース導入の件 藤本

事務局と総務担当が管轄するパソコンシステムのリース契約を更新する。3年リースとする。

6 支部長会議開催の件 藤本

年次晩餐会を開催する日の午前中に、支部長会議を開催する。100周年記念事業の実施に係る理事は出席してほしい。

7 団体会員を永年会員の対象から除外する件 藤本

永年会員の認定は個人会員に限

り、団体会員は除外する。

8 ポカラ山岳博物館開設記念ツアー後援の件 藤本

来年2月5日に行われる「ポカラ山岳博物館」の開館式に参加する人のためのツアーを組むツアー会社(アルパインツアー、ウェットレック、ヒマラヤ観光開発)

3社を後援することにした。

黒川理事より、承認要請に関する資料は理事に配布してほしい旨の要望があり、ツアー内容についての説明があった。

9 新日本ヒマラヤ会議開催の件 藤本

当会が招待して来日するインド山岳会のダム氏が出席する「新日本ヒマラヤ会議」が来年1月25日、ヒマラヤ協会の主催で開催される。参加要請があった。

10 資料提供依頼の件

①NHK富山(冠松次郎氏のポートレート、山行時の写真)

②北海道大学図書刊行会(中尾佐助著作集に『山』280号の図書紹介の転載)

③茗溪堂(パンフレット、ホームページに『山』684号の図書紹介の転載)

④上高地温泉ホテル(田畑氏を株

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウエンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデューをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ** **ALPS WAY.**
<http://www.fellow-travel.co.jp/>
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスウィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** （日本山岳会）
国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウエンゲン観光局・ツェルマット観光局 後援：スイス政府観光局

式会社設立100周年の記念誌編集委員に要請)

11 平山会長訪中の件

平山会長が新任挨拶のために11月17日に中国登山協会を訪問し、王主席、李副主席以下と会談する。藤本常務理事、神崎会員が同行。

【審議事項】

1 秩父宮記念山岳賞受賞者について 芳賀

審査委員長木下是雄氏より、「東チベットの山群、横断山脈踏査」の業績を挙げた中村保会員(4837)を推薦する旨報告があり検討の結果、同氏に決定した。

なお、山陰支部、自然保護委員会から「大山山頂自然保護」に貢献した小西氏の推薦があったが、すでに小西氏はさまざまな賞を受けておられ、当会の推薦審査基準であるオリジナルな業績を挙げており、他からの賞を受けていない者という基準にはずれるので対象外とした。(承認)

2 日中合同女子チョモランマ登山隊派遣計画中止の件 藤本

今回は見送ることとした。

(承認)

3 ガンケルプンズム峰登山計画中断の件 藤本

国境問題もあり中国側からの登山は当面中断する。

なお、ブータンは創立100周年を迎える2005年に新しく3つの山の開放を検討している旨報告があった。(承認)

4 百年史発行年月日決定の件 芳賀

2006年5月第3土曜日(総会時)とする。(承認)

5 プロジェクター(パワーポイント)購入の件 藤本

パソコン連動のプロジェクターを20万円以下で購入すること。(承認)

6 岐阜県知事への書簡発信の件 篠崎

今回は応援団的書簡(別添)であるので問題はないがクレーム等については特に注意を要する。事前に理事会に諮ること。(承認)

7 日本ヒマラヤ協会提案の「登山調査用紙会議」参加の件 藤本

4団体の集まりで、日本山岳会としては大蔵常務理事が対応すること決定。(承認)

8 100周年特別会計設置の件 橋本

3年間にわたる創立100周年記念事業の実施にかかわる収入と

支出を通常の会計と区別して特別会計として実施する。寄付を特別会計に入金し、一部を長期準備積立金より入金する。

すでに東海支部の冬期ローツェ登攀計画に対する支援、中央分水嶺踏査計画でのGPSの購入などに支出している。(承認)

9 中央分水嶺踏査企画実施のための支部への資金援助の件 藤本

●一律にするか計画によるのか、本部はどうしてくれるのかということ支部長会議で回答が必要。

●地図とかGPSとか明確にわかるもので援助すべき 重廣

●電子地図にすべき 宮崎

●通常の2万5千分の1の地図を支給する方が安い 重廣

●何らかの応援が必要 藤本

●財務と中央分水嶺と打合せで議論し決めたい 藤本

(承認)

結論として資金援助する件は了解いただき、中味については担当者で検討実施することにした。

ルーム日誌

11月

4日	総務委員会	アルパインズ
5日	ケッチクラブ	02同期会
6日	山岳地理クラブ	02同期会
7日	会報編集委員会	
8日	フォトビデオクラブ	
9日	総務委員会	スキークラブ
10日	100周年記念委員会	
11日	常務理事会	二火会 アル
12日	パインスケッチクラブ	
13日	山岳編集委員会	
14日	山の自然学研究会	97同期会
15日	百年史委員会	高尾の森づくりの会
16日	SUN燦会	
17日	資料委員会	
18日	百年史委員会	インターネ
19日	ツト小委員会	00同期会
20日	山研運営委員会	三水会
21日	科学委員会	
22日	図書委員会	山遊会
23日	自然保護委員会	九五会
24日	財務委員会	図書委員会
25日	アルパインスキークラブ	
26日	事業委員会	青年部
27日	17、29日 総務委員会	(晩餐会準備のため)

11月来室者567名

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆水野勉氏・講演第35回「山岳圖書を語るタベ」

演題 「本から山へ」——ぼくの

昭和史

日時 2月13日(金)18時30分

会場 日本山岳会集会所

*申込不要

◆シンポジウム「中央分水嶺踏査」開催のお知らせ

科学委員会・創立100周年記念事業中央分水嶺踏査委員会

(後援・国土交通省国土地理院)

日本山岳会創立100周年記念事業、国内登山部門の企画として行われる中央分水嶺踏査に先立って「中央分水嶺とは何か、その定義」「中央分水嶺踏査の意義」「中央分水嶺踏査の経験」「中央分水嶺、ここが面白い！」など分水嶺全般に関して、下記の演者による講演会とパネル・ディスカッションを開催いたします。

日時 2004年2月21日(土) 13時~17時まで
場所 東京グリーンホテル水道橋(東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL 03-329-54161)
演者 星埜由尚氏、近藤善則氏、新妻徹氏、堀公俊氏、森武昭氏、藤本慶光氏
入場料 無料 ただし資料代として500円
*事前の申込みは必要ありません
問合せ 丸山修一 (TEL 03-5212-7035 kagaku@jac.or.jp)

◆ルートファインディング演習山行(上級) 東海支部

指導標や登山道皆無の自然林の山稜で、複雑な地形を観察力と直感力を主たる武器に地形図と磁石を補助として、目的地へ試行錯誤しながら到達する演習。ルート伐採もあり、鉋、鋸、鋸鎌必携。東海支部の森林インストラクター・古里会員指導。

日程 2月28日(土)降雪決行。雨天時3月6日(土)延期(日帰)。
山域 参加者のみに詳報。ルートを通るとクライミング(滝

など)あり。歩程8時間。7時30分名古屋地下鉄東山線・本郷駅。遠方からの参加者は名古屋駅周辺前泊。定員 4名(他支部研修者10名)費用 3000円(交通・宿泊別)申込 2月10日までに会員番号、住所、氏名、電話、FAX、加入山岳保険名と番号、年齢を明記のうえファクスで橋村一豊宛(FAX 0561-3617218 TEL 0561-3613104) *参加者には詳細を送ります。

◆会員異動(11月)

物故

宮地保憲 (4958)	03・9・11
津田康祐 (4064)	03・11・9
加藤義明 (4733)	03・11・11
力丸茂穂 (7136)	03・11・17
佐久間敏明 (13167)	03・11・17
堤甚五郎 (4162)	03・11・21
藤平正夫 (2247)	03・11・23
洪沢 隆 (13085)	03・11・28
垣内康時 (3531)	03・11・29
退会	
村井純一郎 (6986)	
白井和美 (12009)	
瀬川幸三 (12014)	

京都 石川

◆編集後記◆

●新年明けましておめでとうございます。今年のお正月も鹿島槍の麓で迎えましたが、天気の方は今ひとつでした。しかし、心配した遭難は少なくホッとしました。

●今年はいよいよ、巻頭の会長挨拶にもあるように、会の創立100周年の行事が本格的になってきます。全会員参加のモットーの下、ご協力よろしく願います。

●会報の編集を担当して早くも3年目に入りました。会員の活動や研究、所感、提言など自由に投稿していただく「東西南北」欄ですが、できるだけさまざまな方の投稿を歓迎いたします。掲載については編集委員会に一任願いますが、ここでも6000名、全会員参加で紙面を作って行きたいと思っております。(今村千秋)

日本山岳会会報 山 704号

2004年(平成16年)1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 今村千秋
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社